は、私はとても素晴らしい師匠につきました。明治天皇の御前で、御前試合をした剣聖・中山博堂の孫弟子が僕の師匠なんです。だから僕は曾孫弟子なんですよ（笑）。剣道、合気道、弓道、直心影流法定、乗馬もやりました。

―旅行もご趣味と伺いました。

鈴木政務官　昔、インドや中国、ヨーロッパなどへ行きました。学生時代は、お金もないですから節約して、夜行列車での移動もしました。ホテルにも泊まらずに、朝、駅に着いたら、そこで仮眠をとったり、隣にいた見ず知らずの人と、パンとバターを交換したりね（笑）。そういう時期は貴重ですね。

―旅行に行かれた中で一番印象に残っているのはどこですか。

鈴木政務官　それぞれに思い出があり、難しいですね（笑）。考えさせられたという意味では、インドです。富と貧困の両極が一緒にあり、多くの聖人や宗教を生み、混乱もあり、なおかつ人間がものすごいバイタリティーで生きています。私が３０歳の時でしたが、昭和の最後の大晦日に、ガンジス川の聖地ベナレスで、人が目の前で火葬されるのを見ました。

その時に思いましたね。この死者に、もしも気持ちがあるならば、どんなことを思っているのかと。生前、その人が、名望もあり、経済的に豊かな人であったかもしれない。またはその逆だったかもしれない。しかし、そんなことは関係ない。要は、富や名声、肩書きなどは関係ないと。最後は自分の魂が喜ぶかだけだと。

私の価値観も同じで、そういった生き方をしたいと思いますね。

―地元の名物についてお聞きかせください。

鈴木政務官　鰻や自然薯がおいしいですね。まちには寿司屋も多いです。昔、瀬戸が好況な頃、「尾張の小江戸」と言われていました。登り窯といって、大きな窯で、焼き物を焼くのですが、年に１回か、２回しか焼けないんです。大ばくちなんですね。「宵越しの金は持たぬ」という気風のまちでした。たくさんの焼き物職人がいました。そのなごりで寿司屋や鰻屋が多いのです。また、鰻屋が多いのには、実はもう一つ大きな理由があります。土を触っている人は脂分が抜けるため、必然的に動物性脂肪を欲しくなり鰻で補給していたとも言われています。

ほかに、「五目飯」という伝統料理があります。地元では「ごも」といいます。窯を焼き始めたら、みんな総がかりで一週間近く作業をします。ご飯を作っていられません。だから、大きな釜で一度にたくさん「ごも」を炊き毎日食べるのです。

―お時間もないとは思いますが、リフレッシュのためにされていることはございますか。

鈴木政務官　焼き物は奥が本当に深い。宇宙の凝縮なんです。

一番心が安らぐのは、夜中に焼き物を触っているときですね。恐らく他人がその姿を見たら異様な光景だと思いますね（笑）。あるとき好きな作家に、「いくつか持っていますが、なかなか使う時間がありません。」と言うと、「鈴木さん、茶碗でお茶を飲むだけが使うということではない。触れることや眺めていることが、既に使っていることなのです。それで、あなたにパワーを与えているのであれば、作家としてこんなに嬉しいことはない。」と。なるほどと思い、それから気が少し楽になりました。

食後、自宅では自分でお茶をたてます。特に作法はないですが、茶碗をとっかえひっかえ、好きなもので勝手に、時間もないのでぱっとたてて、ぱっと飲みます。でも、その時間は、リフレッシュになりますね。

―最後に、総務省職員へ向けてメッセージをお願いいたします。

鈴木政務官　就任時にも話しましたが、総務省はどのような仕事をしているかと考えたときに、国民のみなさんには、直接的には分かりにくいかもしれません。しかし、目に見えないところで、ものすごく大きな下支えの大事な仕事をやっているのです。ぜひ、胸を張って自信を持ってやってほしいと思います。